

2021年11月7日 説教『神の選び』

高橋克樹牧師

聖書 創世記15章1〜18節a、マルコ福音書12章18〜27節

創世記15章は、アブラムに顕現した神が彼の財産を受け継ぐ子孫を必ず与えるという約束を語った個所です。アブラムは最初全く信じませんでした。自分に子どもがないので、彼は自分の家督を継ぐのは使用人である奴隷の一人であるエリエゼルと考えていたからです。ですから、4節で『その者（エリエゼル）があなたの跡を継ぐのではない。あなたから生まれる者が継ぐ』という神の言葉に接しても半信半疑でした。しかし、神がアブラムを外に連れ出し、数えきれない天の星を指して『あなたの子孫はこうになる』（5節）と約束したことで彼は神の言葉を信じたのでした。ここで神がアブラムに『あなたの受ける報い（贈り物）は非常に大きい』（15章1節）と語ったのは、彼が神からの贈り物として、子孫と土地を与えられるからでした。

さて、ここで考えてみたい。果たしてアブラムのように、私たち信仰者にとっての子孫とは誰のことでしょうか？ 生物学的な遺伝子を受け継いだ子どものことでしょうか。それもあるでしょう。しかし、それだけではありません。私たちが教会という信仰共同体を形成しているのは、それによって、文化的・信仰的遺伝子を受け継ぐ信仰の「後継者たち」を後世に生み出していくためです。それこそが、神がアブラムに約束したことなのです。この意味で、私たちはアブラムの子孫なのです。具体的には、教会とその土地という贈り物を信仰の先達たちから与えられた中で、私たちの信仰が育まれているのです。また、この青戸教会をこの地上に建てた信仰の先達たちの信仰があったので、いま私たちは青戸教会での信仰生活を行うことができているのです。

詩人でもあった今駒泰成牧師が自作の詩集のあとがきで書いていたことです。信仰者は「悲しみや苦しみがあって、私が私になっていく。そのように私も私なりに悲しみや苦しみのなかで聖書を読み、詩を詠み、私が私になってきた」と書いていました。今駒牧師は長く病弱の奥さまを介護しながら牧師をした方で、詩人でもありました。盲人伝道協議会の主事の仕事もしていました。そういう生活の中で、『悲しみや苦しいがあって、私が私になっていく』という言葉を残したのです。信仰者は悲しみや苦難を避けて自分が形成されるのではなく、自分が生きることで生じた悲しみや苦しみがあって、そこで流した涙をことごとく拭ってくださる神の恵みによって、それらの悲嘆や苦難を自らの血肉としていくことで文化的・信仰的遺伝子が形成されていくのです。

神の憐れみの力によって悲嘆や苦難を血肉化することで形成される神の民は、その出発点を回心の出来事に持っています。信仰者は誰もがキリストによって回心させられ、古い自分を脱ぎ捨て、新しい人へと再生されていく存在です。

その体験がパウロのように劇的に起こる人もいるでしょうし、いつのまにか気づいたら信仰者になっていたという人もいるでしょう。しかし、回心という悔い改めを日々経なければ、誰も信仰者として自らを形成することはできないのです。この回心というのは、自己改革することではありません。以前よりも少しはましな人間になることでもありません。また、問題を上手に処理できるような力を獲得することでも、悩みを解決する力を手に入れることでもありません。

もしも教会がこの世で順風満帆に生きるための知恵や手段を提供するところであるならば、教会は本質的な使命を放棄していることになりません。信仰者は自らが神によって日々悔い改めさせられていることを受け入れつつ、この世にある教会はこの世に対して回心を呼びかけているのです。なにも声高に回心を訴えるということではなく、自分を支えてきた生き方や価値観、目標とするものが正しいかどうかの再検討を促すのです。キリストを通して神が与えて下さる救いを求めて、生き方を根底から変えていき、神に向き合う生活を志向していくのです。これまでの生きる選択基準の順位の高かったものを低くし、一番上に神を置き、神の御旨に基づく新しい生き方を始めることが回心であり、悔い改めなのです。

ただ、これがなかなか難しい。私たちが悔い改めたとしても、生きている世界はこれまでと同じで、人が人を蹴落としていくことを是とするような世界のままです。そのような世界の中で悔い改めた信仰者として生きていこうとするならば、何らかの不利益を受ける覚悟が必要です。しかも、いつも神の御旨に従って生きていくことができない自分に向き合うことも起こってくる。弱い自分にも直面させられます。しかし、そういう時にこそ信仰共同体としての教会は個人個人の信仰者をこの世から守る役割を果たすのです。教会はギリシヤ語でエクレーシアと言います。意味は「召し出された者の集会」という意味です。人間の意志や決意による絆を超える、神の働きによって召し出された者たちの集まりが教会なのです。悔い改めは、一人ひとりが体験することですから、その意味で極めて個人的なものです。しかし、それはその一人の個人の体験で終わるものではなく、キリストと結び合われて教会に結び合わされていくための洗礼へと導きます。洗礼というのは、個人が救われるために受けるだけではなく、パウロによれば「皆一つの体になるため」(「コリント12章13節」)に受けるものです。個人的な救いの体験を教会という場で相対化するのです。こうして教会には、この世の利害関係や会社での歯車のような立場から離れて、本来何の関係もない者たちが神の意志によって一つの教会に集められ、同じ神の国を目指してこの世の旅を行っていくのです。この営みを一緒に行っていく中で一つにされていくのです。

一コリント10章は、教会のこの世の旅を、イスラエルの民が体験した荒野での旅と対比させています。1〜5節を読んでみると、イスラエルは皆モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、同じ霊的な食べ物を食べ、同じ霊的な飲み物を飲みました。しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒野で滅ぼされたというのです。パウロは、イスラエルの失敗の体験は『わたしたちを戒める前例』（6節）だと言います。新しいイスラエルとしての教会は同じ失敗をしないために、何をすべきなのか？パウロによると、教会はキリストの体にあずかる聖餐共同体であり、一つの霊によつて結ばれたキリストの体として、霊の賜物を互いのために用いる愛の共同体だと言います。また、キリストの復活にあずかる望みを抱く信仰共同体だとも言います。そして、そのような教会の在り方自体が、この世にあつては伝道的なのです。

現代社会は細分化された小さな世界が寄り集まったようなものです。私たちは自分が帰属するたくさん小さな世界を持っていて、そのときどきで使い分けながら生きています。家族や会社、学校、友人、地域、サークルなどに加えて、趣味やネット上の交流など、異なる領域で異なる自分を演出しながら生きています。そういう世界に生きているので、ともすれば教会もそのような小さな世界の一つになってしまいがちですが、キリストに結ばれているというのは、それらの帰属グループとは根本的な違いがあるのです。全存在がキリストに結ばれて、しかも一つの体である教会の枝とされることで信仰者個人は相対化されず、相対化されることで神に自らをすべて開示できるのです。閉ざされた自己は決して神の御旨に気づくことがありませんし、日々の悔い改めも生じさせません。そして、神はこの世で試練に耐えさせる逃れる道を単に与えるのではなく、新たな出立をさせる道を備えてくれているのです。現代に生きる私たち信仰者は神がアブラムに約束した子孫です。しかも、その子孫としての私たちは、この世の悲しみや苦しみがあつて、私が私になっていくように、神に守られ、導かれて歩む者たちです。生きて働く神がいて、私が私になっていくのです。私が私になっていく過程に働くのは、神の選びです。そして、この私が私になっていく営みが後世に文化的・信仰的遺産を受け継ぐ信仰者たちを教会を通して生み出していくのです。